

令和7年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育の概況	成熟期は平年並からやや遅くなる見込み。3月以降は降雨量が多く、倒伏や赤かび病、うどんこ病が平年より多く見られる。現在の作柄は「並」が見込まれる。
作業の進捗状況	排水対策、収穫準備、適期収穫

1 気象経過（前橋地方気象台データの平年比、※5月は20日まで、参考資料参照）

項目	11月	12月	1月	2月	3月	4月	※5月
平均気温	+1.5℃	+0.3℃	+1.3℃	-0.3℃	+1.2℃	+1.4℃	+0.6℃
降水量	140%	-%	20%	4%	144%	114%	178%
日照時間	105%	115%	115%	106%	96%	104%	103%

2 生育概況

(1) 概要

12月から2月末まで乾燥傾向で続いていたことから生育は緩慢で、は種時期の遅速による生育差が大きくなっていた。3月以降は降水量が増え、気温も平年より上回ったことから、停滞気味であった麦の生育が促進された。出穂期は小麦、二条大麦、六条大麦ともに平年並から3日遅い程度となった。遅く播種したほ場ほど生育は遅れている傾向。成熟期は二条大麦で平年並から1日遅く、小麦、六条大麦で平年並みから3日程度遅れる見込み。

5月上旬にはまとまった降雨があり、二条大麦、六条大麦で倒伏しているほ場が増えている。小麦では、赤かび病が平年より多く発生しているが、県域全体で発生していた前年と比較し少なく、微～少程度となっている。

(2) 病虫害・障害等の発生状況

雑草は、播種後の降水量が少なく土壌が乾燥していたため発生が遅れたが、コアカザ、カラスノエンドウ、ヤエムグラ、スズメノテッポウ、カラスムギ、イタリアンライグラス、ヤグルマギク（畑）の発生が見られる。排水の悪い一部ほ場では、部分的な湿害が見られる。うどんこ病が平年よりやや多い。

(3) 作況は等の調査結果

作況は（さとのそら）のデータの平均は、播種期は11月25日（過去平均比+3日）、出穂期は4月19日（同+3日）、稈長は80.0cm（同103%）、穂長は8.7cm（同103%）、穂数は709本/㎡（同102%）となっている。

農業技術センターの生育基本調査結果（小麦「さとのそら」、11月14日播種）では、4月10日現在の草丈が60.5cm（過去10カ年平均比100%）、茎数が626本/㎡（同91%）であり、節間伸長始期は3月19日（同±0日）、出穂期は4月20日（同+1日）であった。

(4) 作柄のまとめ

小麦の作柄は中部で「並～やや良」、他地区で「並」であることから、県内平均作柄は「並～やや良」が見込まれる。

表 1 小麦作況ほ調査結果（さとのそら）

地 区	播種期 月 日	出穂期 月 日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本／m ²	穂重 g／m ²
平 均	11/25(+3 日)	4/19(+3 日)	80.0(103)	8.7(103)	709(102)	588(115)
前 橋 市	11/18(-)	4/17(-)	82.1(-)	9.0(-)	751(-)	659(-)
伊勢崎市	11/24(+2 日)	4/20(+5 日)	74.7(100)	8.0(98)	654(109)	489(101)
高 崎 市	11/21(+4 日)	4/18(+4 日)	78.2(107)	8.2(101)	681(109)	585(132)
太 田 市	12/ 3(+4 日)	4/22(+2 日)	77.9(101)	8.9(109)	576(97)	571(119)
千代田町	11/22(+3 日)	4/19(+1 日)	89.0(104)	9.5(103)	926(97)	705(112)

*各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

*日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

過去の平均値は、前橋市は令和 6 年ほ場変更により過去値なし、伊勢崎市は過去 3 年、高崎市は同 5 年、太田市は同 10 年、千代田町は同 3 年の値。前橋市は県平均から除外した。

表 2 農畜産課・地域農業課内の麦類の作柄概況

地 区	県平均	中 部	伊勢崎	西 部	東 部	館 林
作柄概況	並～やや良	並～やや良	並	並	並	並

3 技術対策

(1) 収穫準備・適正収穫

- ア 収穫までの降雨に備え、排水不良のほ場では、排水溝の確認や手直しを行う。
- イ 収穫物に雑草種子や異種穀粒などが混入しないよう対策（抜き取る等）を行う。
- ウ 機械類の清掃を徹底し、収穫物への異物混入を防止する。
- エ 荷受け施設においては、麦の生育状況に合わせた稼働計画を設定する。
- オ 著しい生育むらによる未熟粒の多発・倒伏・穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病の有無を確認し、これらの発生が認められた場合は別収穫とし、乾燥調製施設への搬入は行わない。
- カ 収穫適期の目安は、穀粒水分が 25%以下になった時を基準とする。穂首の曲がり状態で判断すると、二条大麦が 90%以上、小麦・六条大麦が 50%以上の時である。ただし、遅発穂が見られる場合は収穫を数日遅らせる。
- キ 二条大麦は穀皮が薄く損傷粒が発生しやすいので、コンバインのこぎ胴回転数の設定に留意する。
- ク 成熟期後に長雨が予想される場合、穂発芽を避けるため収穫可能な状態となったら、できる限り速やかに収穫作業を行う。

(2) 乾燥・調製

- ア 収穫した穀類をそのまま長期間放置すると発熱により品質が低下するため、収穫作業は乾燥能力に見合った量とし、計画的に実施する。やむをえず高水分麦を収穫した場合は、速やかに乾燥を行う。
- イ 乾燥調製施設では、穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病等の被害粒やカラスノエンドウ等の雑草種子が混入しないよう荷受時の確認を徹底する。
- ウ 枯れ熟れ等の影響により細粒・未熟粒・硬質粒の発生が懸念されることから調製時は流量等に留意するとともに、必要に応じて色彩選別機等を活用して丁寧に調製する。フルイ目はビール大麦が 2.5mm、六条大麦（食用）と小麦が 2.0mm を基準とし、必要に応じてフルイ目の調整を行う。整粒歩合は小麦 80%以上、ビール大麦 90%以上、乾燥仕上がり水分は小麦が 12.5%以下、ビール大麦・六条大麦が 13%以下とする。

(3) 災害対策等

降ひょうにより麦が脱粒したり、その他の災害等によりやむを得ずすき込む場合など、麦種実がほ場に投入される場合は後作の施肥量の調整を行う。後作が水稻の場合は、脱粒子実が 300kg/10a 程度では基肥窒素を 1～2 割減肥し、400kg/10a 以上では 2kg/10 a 程度にとどめる。さらに、土壌の強還元化を防止するため、間断かん水や中干し等の水管理を十分に行う。

(4) 麦わら処理

麦わらは有効な資源である。焼却は避け、すき込むなど適正に処理する。

【参考資料】

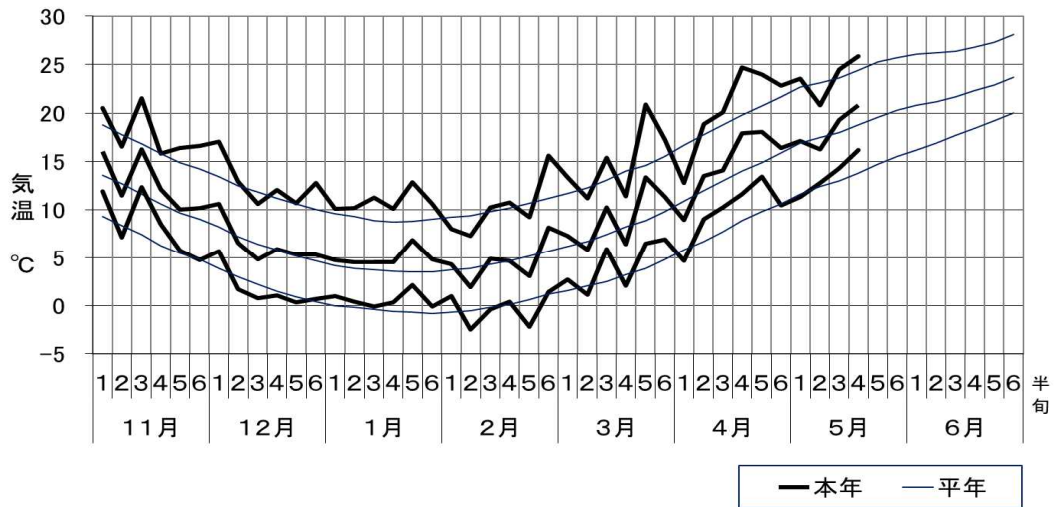


図1 麦作期間の気温（前橋地方気象台）

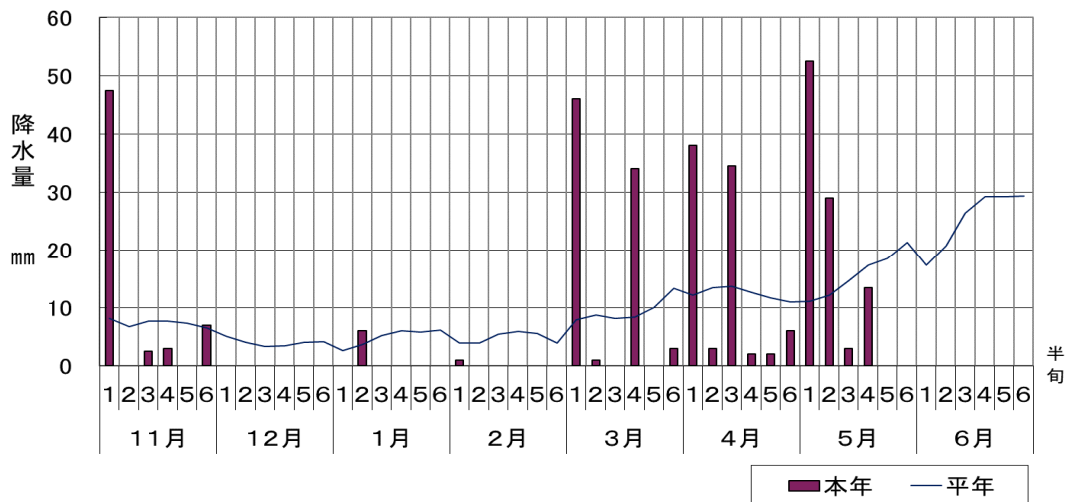


図2 麦作期間の降水量（前橋地方気象台）

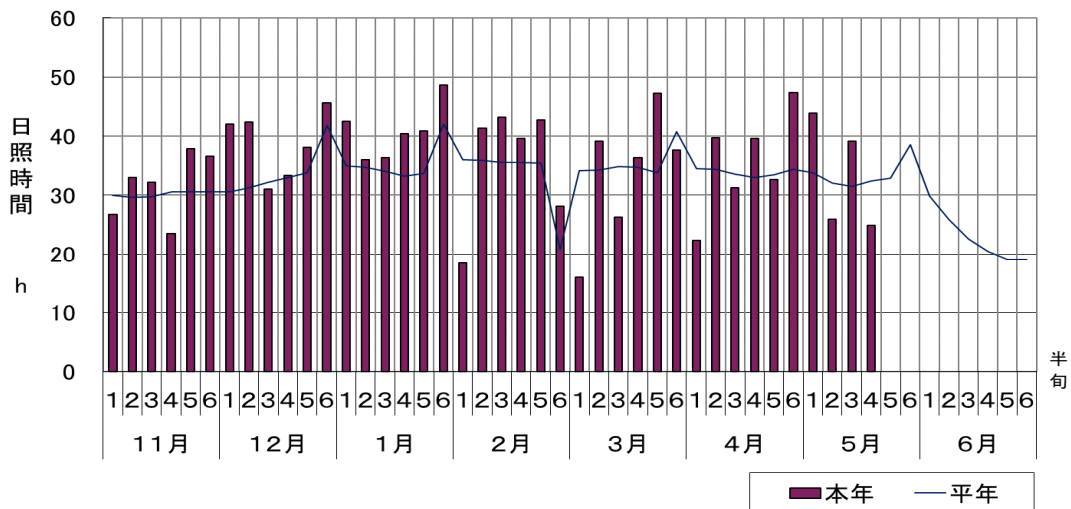


図3 麦作期間の日照時間（前橋地方気象台）